



CITIZEN OF THE YEAR 2017

社会に**感動**を与える人々を
応援します



清水 辰吉さんによせて

苗木は「希望」です。清水さんから贈られた苗木は、子どもたちとともに成長し、やがて立派な樹木へと育っていくことでしょう。そんなメッセージが感じられる苗木を、故郷の後輩たちへ贈り続ける愛情に感動しました。その愛情を「樹」という文字で表現しました。
武田 双雲

01 | CITIZEN OF THE YEAR 2017

地元小学校の新一年生に苗木を贈り続けて半世紀

清水 辰吉さん / しみず たつきち 1928年(昭和3)年生まれ。群馬県在住



人々に感動を与え、社会に希望の光を灯す活動に
私たちはこれからもエールを送り続けます。



シチズン時計株式会社
代表取締役社長
戸倉 敏夫

シチズン・オブ・ザ・イヤーは、市民社会の発展や幸せ、魅力づくりに貢献し、人々に感動を与えた活動を称え顕彰するもので、今年で28回目を迎えます。受賞者の皆さんはそれぞれ、未来を担う子どもたちや海外から訪れる障がい者の方々、そして競走馬の命を見つめ続けており、他者を思いやる優しさにあふれています。その熱い想いは人々に感動を与え、社会に希望の光を灯してくれるものです。

私たちも、企業として何ができるか、企業は社会とどのように向き合うべきなのかを模索してきました。そして、シチズン時計が創業100周年を迎える今年、グループの従業員が自らの意思で国内外の社会貢献活動に参加する「シチズン社会貢献活動派遣制度」をスタートさせます。

私たちはこれからも、より良い市民社会の実現に向け、人々に感動を与えてくれる活動に光をあて、エールを送ってまいります。

シチズン・オブ・ザ・イヤーとは

市民に感動を与え、より良い社会づくりに貢献した人々を顕彰しています。毎年、1～12月までに発行された主要日刊紙の中から、賞にふさわしい記事を選び、主要新聞の社会部長や有識者で構成する選考委員会により、3組の受賞者が決定します。日本人はもちろん、日本で市民社会に貢献された外国人の方も顕彰しています。

2017年度 選考委員会

- 委員長 山根 基世 元NHKアナウンス室長
- 委員 磯崎 由美 毎日新聞社 社会部長
- 香山 リカ 精神科医、立教大学現代心理学部映像身体学科教授
- 長谷川 玲 朝日新聞社 社会部長
- 原口 隆則 読売新聞社 社会部長
- 益子 直美 スポーツコメンテーター
- 三笠 博志 産経新聞社 編集局次長兼社会部長
- 八木谷 勝美 日本経済新聞社 社会部長

敬称略・五十音順
※肩書は、2018年1月現在

Contents

3 清水 辰吉さん

地元小学校の新一年生に苗木を贈り続けて半世紀



7 グリズデイル・バリージョシュアさん

日本のバリアフリー情報を英語で外国人旅行者に発信



11 角居 勝彦さん

引退馬のキャリア支援で馬と人との共生を目指す



15 対談

シチズン・オブ・ザ・イヤー選考委員長 山根 基世さん & 2017年度受賞者 角居 勝彦さん

18 歴代受賞者一覧

各受賞者へ贈る書



書道家
武田双雲

1975年熊本生まれ。東京理科大学卒業後、NTTに就職。約3年後に書道家として独立。NHK大河ドラマ「天地人」や世界遺産「平泉」、世界一のスパコン「京」など数々の題字を手掛ける。独自の世界観で、全国で個展や講演活動を行っている。メディア出演も多数。

清水 辰吉さん 子どもたちの健やかな成長への 願いを苗木に託して



「入学式の朝、苗木を軽トラックに積んで登校する私自身がワクワクし、いつしか生きがいとなりました」
地元小学校の新生入生に、半世紀以上にわたり苗木を贈り続けている清水辰吉さんにとって春は、
校庭の桜が満開で、一年で最も心躍る季節です。今年も入学式で
子どもたちに苗木を手渡す清水さんの目には、健やかな成長を願う思いがあふれていました。



長女の入学記念の 植樹をきっかけに 苗木贈呈がスタート

「この苗木はほとんど育て、天をつくように大きくなるよ。皆さんも木に負けないよう元気に大きく育ててね」

群馬県安中市に住む元群馬県職員の水さんが、そんなふうな声を掛けて、地元小学校の新生入生に苗木を贈るようになったのは1963年のこと。前年の春、長女の掲子さんが小学校に入学した際、当時県の林業指導職員として緑化事業に取り組んでいたこともあり、娘の健やかな成長を願って、自宅の庭にスモモ、モモ、ブドウの3本を植えたことがきっかけでした。

このとき清水さんは「卒業記念の植樹はよく耳にするが、入学記念はあまり聞かない。これは、新入学を迎えるほかの家庭でも喜んでもらえるのでは」と直



きっかけは長女・掲子さんの小学校入学でした

感。娘が通う地元の上後閑小学校（現在は後閑小学校に統合）の校長先生に新生入生への苗木贈呈を申し出て、翌年の入学式から苗木の贈呈がスタートしたのです。

入学や卒業時に贈られる記念品は多種多様ありますが、苗木は贈り物の中でも特別で、子どもたちと一緒に成長していきます。清水さんはそんな苗木を、ツツジや

サクラ、ハナミズキ、クリ、ミカン、モモ、カキ、キンモクセイなど多彩に用意し、毎年新生入生に贈呈してきました。活動は半世紀以上に及ぶため、兄弟姉妹はもちろん、親子二代にわたって苗木を贈られた家庭も珍しくありません。

56年目となった2018年の入学式でも、苗木に込めた想いを14人の新生入生に優しく語りかけま

子どもたちの 健やかな成長と、 ふるさとに花と緑を

「今は、どうして苗木を植えるのだろうと思うかもしれない。でも、5年、10年、20年と経つうちに、木はどんどん大きくなって、花が咲き、実がなるようになる。す。そのときに、ああ、これは僕の木だ、私の木だと思つて、入学式でもらったことや植えた日のことをきつと思ひ出すよ。お父さんもお母さんも、植えて良かった、子ども

入学式での笑顔 思い浮かべ、 丹精込めて準備

地元、上後閑小学校の児童数は、1959年をピークに減少傾向が続き、苗木の贈呈を始めた1963年以降も年々減つていきました。そして2010年、贈呈を開始してから初めて新入生児童がゼロとなり、それまで継続してきた活動が途絶えそうになりました。しかし清水さんは、「この活動を絶やすわけにはいかない」と、いつもと同じように苗木を準備し、上後閑小学校の校庭に植樹して活動を翌年につないだのです。



さまざまな種類の苗木を用意し、好きな苗木を選んでもらいます

ところが、少子化の波は変わることなく、翌2011年、上後閑小学校は後閑小学校に統合され、その歴史に幕を下ろすことになりました。

それでも、清水さんの苗木の贈呈が途絶えることはありませんでした。活動を始めたときの「子ども

贈呈する苗木の準備では、家族の協力も大きな支えになってきました。入学式当日は特に忙しく、奥さまのうた子さんと娘の掲子さんは、早朝から苗木の一本一本に紅白のリボンを付ける準備などに汗を流し、家族全員が協力して活動を継続してきたのです。今年も14人の新生入生に苗木を2本ずつ贈るため、人数分より多い30本の苗木を用意し、できるだけ好きな苗木を選べるようにしました。

丁寧に根や芽の処理をし、子どもたちに贈る苗木を準備する清水さん

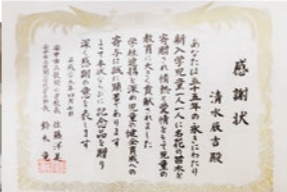
また清水さんは、接ぎ木や挿し木などで苗木を増やすことが体力的にきつくなつてからも、買ってきた苗木をそのまま子どもたちに贈ることはしていません。苗木を受け取る子どもたちの笑顔を思い浮かべながら、きちんと根や芽の処理をして自宅の庭に仮植えをし、入学式の日にはそのまま植えても大丈夫なようにしてから、リボンを付け、手渡しています。

生あるかぎり続け、皆さまの期待に応えたい

これまで苗木を贈呈した児童数は370人を超えました。活



2017年には小学校とPTAから感謝状が贈られました



動を続けてきてうれしいことの一つが、苗木を贈った児童や親から「きれいな花が咲いたよ」「今年もおいしいクリの実がなったよ」と声を掛けてもらえることだと話す清水さん。「感謝されるから行う行為は本物ではないと承知していますが、新聞で紹介していただいたり、人から褒められたりすると、自分のやっていることは間違っていないと感じることができ、これからも続けようという自信が湧いてきます」と目を細めます。



「畑の先生」としてサツマイモづくりなども指導

れました。「人は褒められ、認められて育っていく」と常々話す清水さんにとって、地域からの感謝の言葉は大きな力になったことでしょう。小学校や地域とのつながりは苗木の贈呈にとどまりません。地域

喜びと感謝の言葉が、活動を続ける大きな力に



親子2代にわたって苗木を贈られた家庭も珍しくありません

の仲間と一緒にサツマイモの植え付けから収穫までを指導する「畑の先生」としても、子どもたちから慕われています。毎年、小学校の校庭の一角に設けた畑で児童とともにサツマイモの苗を植え、その後は畑の見回りや育て方の指導を行い、秋のサツマイモ掘りから収穫祭まで労を惜しまず協力しています。

56年前のあの日、掲子さんの入

学祝いに植えたスモモは、清水さんの家族やふるさとを見守るように大きく育ち、春がくるたびに美しい花を咲かせます。そしてそんな木々が、毎年増え続けているのです。

いつしか苗木の贈呈が生きがいになったという清水さんは、「生あるかぎり続けて、子どもたちのためにもとより、皆さまのご期待にお応えしたい」と熱い想いを語ります。



苗木を贈った新入生と清水さん。入学式からの帰途はいつも爽やかな気持ちになると話します



双雲 

グリズデイル・パリージョシュアさんによせて

障がいのある方の不便さ、ストレスを理解しているグリズデイルさんだからこそ、海外の方が日本を旅行するときにどういった情報があれば助かるか、気持ちよく動けるかを考え抜くことができるのだと思います。

その優しさと動き続ける情熱を、「動」という文字で表しました。

武田 双雲

02 | CITIZEN OF THE YEAR 2017

日本のバリアフリー情報を英語で外国人旅行者に発信

グリズデイル・パリージョシュアさん / 1981 (昭和56) 年、カナダ・トロント市生まれ。活動地・東京都



グリズデイル・バリージョシュアさん

一人でも多くの 障がい者を 愛する国、日本へ



「アニメが大好きな娘を日本に連れて行きたいのですが、脳性まひの障がいであきらめていました。でも、あなたのバリアフリー情報を見て勇気をもらいました。来年行きます！」オーストラリアから届いたメールに、グリズデイル・バリージョシュアさんはうれしさを目頭が熱くなりました。サイトを作って本当に良かったと思う瞬間です。

初めて訪れた日本での 親身な対応に 住みやすさを実感

カナダ・トロント生まれのグリズデイルさんにとって、初めて訪れた日本は言葉も文化も建物も異なる、まさにワンダーランドでした。生後半年のころに出た高熱が原因とみられる障がいが手足に残ったグリズデイルさんは、4歳ころから電動車いすの生活となりました。日本に興味を持つようになったのは高校2年生のとき。将来、IT関連の仕事に就きたいと考えていたことから、キャリアアップに活かせるのではないかと日本語を学び始めたのがきっかけです。



高校2年での日本語との出会いがすべての始まり

先生は、長く日本のインターナショナルスクールで教えていたカナダ人で、言葉だけではなく、歴史やサブカルチャーまで楽しく教えてくれ、日本への興味がどんどん膨らんでいきました。そして2000年の夏、高校卒業のお祝いとして、父親と2人、1カ月にわたる初めての日本滞在が実現したのです。「見るものすべてが初めての経験で驚きの連続でした。日本に来る前は移動に不安があったのですが、実際に来てみて、バリアフリーが進んでいることにも驚きました」滞り中はIT関連のボランティアをしながら、大好きになった秋葉原はもちろん、

情報発信を通じて
障がい者の
可能性を広げる



移動に不安を持って訪れた日本は障がい者に優しい国でした

箱根などへも足を伸ばし、日本の旅を楽しみました。中でも印象的だったのが日本人の温かい対応です。地下鉄浅草駅のエレベーターがない場所では、体重と合わせる2000キロにもなる電動車いすに乗ったグリズデイルさんを、駅員さんが6人がかりで運んでくれました。「落とされなかと内心では心配しましたが（笑）、親身な対応にとっても感動しました」と振り返ります。

カナダの駅でこうした対応を受けたことはありませんでした。さらに日本では電車に乗り込むときにスロープを用意してくれただけでなく、降りる駅でも連絡を受けた駅員さんが待っていてくれて感動したと言います。このときの体験が「暮らしやすい日本」を強く印象づけ、いつかは住んでみたいという日本への愛を育んだのです。

日本への想いを募らせ、 カナダの会社を辞めて来日

大学時代にも、両親や友人と2度にわたり日本を訪れたグリズデイルさんは、卒業後、地元カナダのIT企業に就職しますが、日本に行きたいという想いをずっと募らせていました。それは、遊びに行きたいというのではなく、「日本に戻りたい、戻って長く働きたい」というものでした。

こうして2007年、日本のNPO法人の求人に応募して採用されると、就労ビザを取得して念願の来日を果たしたのです。26歳のときでした。

そこで5年ほど働いたグリズデイルさんは、現在の職場である社会福祉法人にウェブマスターとして採用され、ホームページの管理をするようになりました。ちょうど東京五輪・パラリンピックの開催決定や、日本を訪れる旅行者が急増してきた時期でもあり、そうした状況の中で、グリズデイルさんはある一つのアイデアを思いつきます。それは、障がいのある外国人旅行者に向けて日本のバリアフリー情報を英語で発信しようというものです。

「私がやらなくては」という使命感を持って

その原点には、英語によるバリアフリー情報が少なく苦労した経験があると言います。「日本には、せっかく素晴らしいバリアフリー対応サービスがたくさんあるのに、英語の情報が足りないために旅行をあきらめてしまう外国人がいるのはとても残念。自分が大好きになった日本を、みんなにも好きになってほしい。それなら自分の経験をもと



英語による障がい者向け日本観光情報サイト「ACCESSIBLE JAPAN」



職場ではホームページの運営・管理を担当

英語による日本のバリアフリー情報を求めていたかを、改めて実感させるものでした。今では、サイトに毎月4000人もの訪問者があり、毎日のように問い合わせのメールが届きます。アメリカやイギリスなどの英語圏はもちろん、英語を使う香港やシンガポール、フィリピン、マレーシアなど、アジアの方からも問い合わせがあり、広がりを見せているそうです。

うれしい出会いもあります。障がいのある3人の旅行者が来日する際に、車いすがレンタルできないかとメールで相談され、手伝ったことがありました。数日後、街で偶然車いすに乗る3人連れを見かけ、もしやと思つて声を掛けるとその方たちで、「今でも連絡を取り合う仲です」と笑みがこぼれます。

日本人としての責任を持ちたいと日本国籍も取得

2016年には、これまでお世話になった日本に恩返しをしたい想いと、日本人として責任を持ちたいという想いから日本国籍を取得しました。



バリアフリーチェックでは障がい者の視点でスロープやトイレなどの状況を確認



明るくユーモアがあり職場でも人気者

サイトの運営を続ける原動力にも、恩返しの気持ち強いと話すグリズデルさん。「これまで多くの方から情報をいただき安心して日本を旅行できました。同じように、次に訪れる人にも安心して日本の旅を楽しんでほしいです」

情報を提供する立場になってみると、ホテルにバリアフリーの部屋がまだまだ少ないことや、予約方法に課題があること、短期間の車いすレンタルが難しいことなど、さまざまな問題も痛感します。もちろん、情報提供以外で手伝えることには限界がありますが、それ

でも、「自分のように、海外から日本に来て、英語がわかり、しかも障がいのある外国人は少ないですから、私がやらないと誰がやるんだという気持ちです」と想いを語ります。

そんな熱意に応えるように、情報を寄せてくれる協力者も増えてきました。これからは、首都圏だけでなく、日本全国のバリアフリー情報を増やしていきたいと考えており、「そのためにも人とのつながりをもっと広げていきたい」と、さらなるサイトの充実に向けて意欲を燃やしています。



双雲
武田 双雲

角居 勝彦さんによせて

いろいろな文字を考えたのですが、やはり角居さんはど真ん中「馬」にしました。障がいのある子どもたちやお年寄りの心身の機能回復をめざすホースセラピーをはじめ、引退した競走馬のセカンドキャリア支援に取り組む姿に馬への愛をひしひしと感じ、その愛を「馬」という文字で表現しました。

武田 双雲

03 | CITIZEN OF THE YEAR 2017

引退馬のキャリア支援で馬と人との共生を目指す

角居 勝彦さん / すみい かつひこ 1964(昭和39)年生まれ。滋賀県在住



角居 勝彦 さん

感謝の心で切り開く 引退した馬たちの新たな道

「厩舎で大暴れしていたお前が、小さな子どもを乗せて歩けるまでになったんだなあ」
再調教によって競走馬から乗用馬に生まれ変わった馬を見ながら、
調教師・角居勝彦さんのまなざしは優しさに満ちています。
角居さんにとって、馬と触れ合う人たちが見せる笑顔は、
自分にとって一番のエネルギーだと言います。



はかない運命を背負った
競走馬を支えようと
調教師の道へ

骨折した仔馬の足を見つめ、「この子どうなるんですか？」と訊ねる角居さんに返ってきたのは、「無理だな…」という短い返事でした。それは殺処分を意味していました。石川県の高校を卒業後、サラブレッドを生産・育成する北海道の牧場に就職した角居さんは、速く走ることを求められる競走馬の存在を知り、同時に衝撃的な現実を目の当たりにしたのです。



活動の原点となった北海道の牧場。
ここから競走馬と歩む人生が始まりました

「骨折しただけで運命が振り分けられてしまう瞬間に立ち会う中で、自分もこの仕事を続けるのかどうかが振り分けられているような気がしました。」

がしました。そして、そんな運命を背負った競走馬を支えながら生きていくなら、逆にやりがいのある仕事だと思ふようになりました。こうして、競走馬により近い競馬の世界で働きたいと思った角居さんは、牧場をやめて日本中央競馬会（JRA）の競馬学校に入学。卒業後は厩務員、調教助手として経験を積みながら調教師を目指したのです。実際に厩舎で働いてみると、馬の力を引き出せなかったり馬自身の不運もあったりして、1勝もできずに引退する馬が少なくありませんでした。

勝てる馬を育てられてこそ、
救うことができる



望の角居厩舎を開業し、3年後に菊花賞でG1を初制覇して以来、最多勝利調教師賞3回、最多賞金獲得調教師賞5回という輝かしい実績を残してきました。

走るだけではない
高い能力を
知ってほしい

調教師として活躍する一方、角居さんは引退していく馬を救いたいという想いをずっと持ち続けていました。「実績

のない人間が一頭二頭の馬を救ったところで何も変わらない。レースで勝てる馬をしっかりと育て、周りから認められる調教師になってこそ、自分の発言も聞いてもらえ、組織的な活動で引退馬を助けることができるようになる」との信念で、調教師の仕事にまい進してきました。活動の原点となった牧場時代に抱いた想いを、角居さんはトップトレーナーになるまで決して忘れることはなかったのです。具体的な活動の契機となったのは「ホースセラピー」との出会いでした。馬を使って不登校や引きこもりの子どもたちを支援する団

体があることを知り、速く走るだけではない馬の高い能力を知ってもらおうと、イベントを企画したので。それが、2011年10月に行われた第1回の「サンクスホースデイズ」でした。馬に感謝する日」と題されたこのイベントには、障がい者をはじめ、大人から子どもまで大勢参加し、馬との触れ合いや乗馬体験、馬術競技のアトラクションなどで馬の高い能力を披露しました。「しかし、馬主さんたちの寄付はイベント費用で一瞬にして消えてしまいました。継続するにはきちんと組織立った活動にしなければならぬ」と痛感しました」

日本国内では現在、年間約7千頭のサラブレッドが生産されますが、このうちレースで活躍できるのはごく一部。さらに、最高峰のG1レースに勝利し、種牡馬や繁殖馬として余生を送れるのはほんの一握りに過ぎません。それ以外は、乗馬用に転用される数も限られ、飼育に多額の費用がかかることもあって引退後に行方不明や殺処分になるケースが多いのです。そんな厳しい競馬の世界に飛び込んだ角居さんは、2000年に調教師免許を取得。翌年に待



2007年、牝馬として64年ぶりに日本ダービーを制覇したウオッカをねぎらう角居さん

シチズン・オブ・ザ・イヤー選考委員長

山根 基世さん

対談

2017年度受賞者

角居 勝彦さん

身近に馬がいて誰もが楽しめる コミュニティを目指して



Motoyo Yamane

NHKアナウンサーとして数多くの番組を担当。NHK初の女性アナウンス室長に就任。NHK退職後、子どもの言葉を育てる活動に取り組んでいる

Katsuhiko Sumii

シチズン・オブ・ザ・イヤー選考委員長の山根基世さんが、2017年度の受賞者、角居勝彦さんを滋賀県栗東市の厩舎に訪ね、引退馬のセカンドキャリア支援に取り組む想いや、馬の持つ素晴らしい能力などについて伺いました。そこからは馬に対する深い愛情が伝わってきました。

毎日世話をする中で
どんどん好きになって

山根 競馬界のトップトレーナーである角居さんが、速く走ることをだけを求められる競走馬の価値観を覆し、引退した後もさまざまな分野で活躍できる場を広げようとしていることに感動しました。その原点は、牧場で働き始めたころにあるそうですね。

角居 牧場に就職したのは、特に馬が好きでということではなく、実は親から逃げるために選んだのがたまたま牧場だったんです(笑)。それで牧場に来てみると、500キロもある大きな動物と共に生活するのは初めての経験ですから、毎日が驚きの連続でした。そうした中で、自分が世話をしていた仔馬が、足を骨折しただけで殺処分になる現実を直視し、非常にショックを受けたのです。

山根 サラブレッドは、仔馬のころから悲しい運命を背負っているのですね。

馬との触れ合いは、心身のリハビリ効果に大きな期待を集めています



言葉を 交わさなくても 通じ合える人と馬

こうして2013年12月、一頭でも多くの引退馬を救い、セカンドキャリアを支援するため、一般財団法人「ホースコミュニティ」を立ち上げました。同時に、事務局のスタッフが日本全国で行われているホースセラピーや障がい者乗馬などを見て回って仕組みづくりを進め、2016年には引



人々を癒やしてくれる馬の活躍の場は年々広がりを見せています



さまざまな活動で引退馬支援の輪を広げている「サンクスホースプロジェクト」

退した馬をセカンドキャリアにつなげる「サンクスホースプロジェクト」が始動しました。

感謝の気持ちで
馬を市民に近づけたい

プロジェクトでまず重要なのが、速く走ることや闘争心を教え込

2011年に始まった「サンクスホースデイ」も、2018年3月の名古屋競馬場での開催で18回目を迎えました。乗馬体験をした人の中には、子どもが交通事故に遭ってから高い所に恐怖を感じ

また競走馬を、乗馬やセラピー用に再生するリトレーニング(再調教)です。これには人件費や治療費、飼料代がかかり、引退馬を引き受ける乗馬クラブの負担となっています。そんな中、趣旨に賛同してくれた岡山乗馬倶楽部(岡山県吉備

るようになったのが馬に乗ること。怖さがだんだんなくなり、今では楽しみにしているという家族の声も聞かれました。角居さんは、「馬と触れ合った人たちの笑顔が、自分の一番のエネルギーです」と笑みがこぼれます。

でも心で通じ合えるから、コミュニケーションを取るのが苦手な不登校の子どもたちなども馬に癒やされるのです」と話します。

今後に向けての課題は、まず馬のこともセラピーやリハビリのことも分かる人材を育てることだと言えます。「調教師としてこれまでたくさん試練もありましたが、馬によって今の自分があります。そんなすべてに感謝の気持ちを、市民の皆さんにもっと馬を近づけていきたいです」と想いを込めます。



馬はパートナーの関係を築かないと、一緒に歩いてくれない動物ですと角居さんは話します



馬を救うことが ご自身を救うことにも なっているのですね

山根 角居さんはそうした引退馬を支援するホースコミュニティの活動も、角居さんは近代的な合理的な仕組みを作ることから始めておられるのにも感銘を受けました。だからこそ、賛同者も増えるし、ネットワークも広がるのでしょう。

角居 ネットワークの広がりには、馬がいる限り僕もここにいます、という状況も大きいのかもしれません。「栗東の厩舎に行けば角居に会える」ということで、さまざまな取り組みをしている方が会いに来てくれます。それが人から人へのつながりとなつて、乗馬クラブやNPO、大学、企業などと多様な連携が生まれています。

山根 ホースコミュニティの活動は、引退馬のセカンドキャリア支援が中心ですが、今後は馬を介したコミュニティづくりに取り組みたいなとおっしゃっていますね。

角居 最終的には、高齢者から子どもたちまで、皆の身近に馬がいて誰もが楽しめるコミュニティを作りたいというのが目標です。

山根 今、北海道で新しい試みを進められているとお聞きしましたが、その一環ですか。

角居 浦河町という所で、障がい者乗馬の団体が精神科のお医者さんと共同で、障がい者乗馬用の馬を育成する計画を進めています。そこでは、乗馬用の馬のしつけも、障がいのある方自身が行うというものです。

山根 それは皆さんの就労支援にもなりますし、



馬と触れ合ったときの 皆さんの笑顔に 元気をもらっています

角居 速く走ることだけが存在理由の動物だと改めて知るようになって、そのはかなさがサラブレッドをより輝かせている気がしました。そして、毎日世話をする中で、どんどん可愛くなつていく馬のために、自分にもつていくことはできないかという想いが強くなつていききました。その想いは調教師になつてからもずっとあつて、引退後に行方不明や殺処分になる競走馬を救いたいという想いが募つていったのです。

山根 すべての馬がレースで勝てるわけではありませんものね。

角居 速く走れないという能力の壁もありますが、自分の調教が失敗することもありません。レースの日に体調が整わなかったり、直前にケガをして勝負チャンスを失つて、次のステップにつなげてあげられなかった馬に対する申し訳ない気持ちもありました。

馬との接し方も変えたセラピーとの出会い

山根 角居さんはそうした引退馬を支援するホースコミュニティの活動も、角居さんは近代的な合理的な仕組みを作ることから始めておられるのにも感銘を受けました。だからこそ、賛同者も増えるし、ネットワークも広がるのでしょう。

角居 ネットワークの広がりには、馬がいる限り僕もここにいます、という状況も大きいのかもしれません。「栗東の厩舎に行けば角居に会える」ということで、さまざまな取り組みをしている方が会いに来てくれます。それが人から人へのつながりとなつて、乗馬クラブやNPO、大学、企業などと多様な連携が生まれています。

山根 ホースコミュニティの活動は、引退馬のセカンドキャリア支援が中心ですが、今後は馬を介したコミュニティづくりに取り組みたいなとおっしゃっていますね。

角居 最終的には、高齢者から子どもたちまで、皆の身近に馬がいて誰もが楽しめるコミュニティを作りたいというのが目標です。

山根 今、北海道で新しい試みを進められているとお聞きしましたが、その一環ですか。

角居 浦河町という所で、障がい者乗馬の団体が精神科のお医者さんと共同で、障がい者乗馬用の馬を育成する計画を進めています。そこでは、乗馬用の馬のしつけも、障がいのある方自身が行うというものです。

山根 それは皆さんの就労支援にもなりますし、



山根 厩舎での人づくりでも、引退馬を支援するホースコミュニティの活動も、角居さんは近代的な合理的な仕組みを作ることから始めておられるのにも感銘を受けました。だからこそ、賛同者も増えるし、ネットワークも広がるのでしょう。

角居 ネットワークの広がりには、馬がいる限り僕もここにいます、という状況も大きいのかもしれません。「栗東の厩舎に行けば角居に会える」ということで、さまざまな取り組みをしている方が会いに来てくれます。それが人から人へのつながりとなつて、乗馬クラブやNPO、大学、企業などと多様な連携が生まれています。

山根 ホースコミュニティの活動は、引退馬のセカンドキャリア支援が中心ですが、今後は馬を介したコミュニティづくりに取り組みたいなとおっしゃっていますね。

角居 最終的には、高齢者から子どもたちまで、皆の身近に馬がいて誰もが楽しめるコミュニティを作りたいというのが目標です。

山根 今、北海道で新しい試みを進められているとお聞きしましたが、その一環ですか。

角居 浦河町という所で、障がい者乗馬の団体が精神科のお医者さんと共同で、障がい者乗馬用の馬を育成する計画を進めています。そこでは、乗馬用の馬のしつけも、障がいのある方自身が行うというものです。

山根 それは皆さんの就労支援にもなりますし、

くなれる気がしました。

角居 人と人の接点の中でどこか心が疲れてしまった人は、500キロもある大きな馬が自分の歩いた後ろをついて歩いてきてくれるだけで、とても親しくなる気がするんだと思います。それが乗って歩けるようになり、自分の思うように動いてくれるようになれば、気持ちの高揚感もあるんですね。

山根 ホースセラピーに出合ったことで、角居さんご自身のお仕事にも変化はあったのですか。

角居 調教師として馬への接し方がずいぶん変わりました。競走馬というのは、レースに向けて精神的に追い込んで勝たせる方法が一般的です。しかし、そんなふうに入からストレスを与えられると、人嫌いな馬になつてしまう可能性があるのです。そうではなく、馬と人が本当にいい関係で約束事がよく守られるよう調教すれば、引退後もいい関係でいられるのです。しかも、そうした調教の仕方に変えても、レースでの成績は下がらないんです。

山根 そうなんです。その

馬を救うことが
自分のエネルギーに

山根 厩舎での人づくりでも、引退馬を支援するホースコミュニティの活動も、角居さんは近代的な合理的な仕組みを作ることから始めておられるのにも感銘を受けました。だからこそ、賛同者も増えるし、ネットワークも広がるのでしょう。

角居 ネットワークの広がりには、馬がいる限り僕もここにいます、という状況も大きいのかもしれません。「栗東の厩舎に行けば角居に会える」ということで、さまざまな取り組みをしている方が会いに来てくれます。それが人から人へのつながりとなつて、乗馬クラブやNPO、大学、企業などと多様な連携が生まれています。

山根 ホースコミュニティの活動は、引退馬のセカンドキャリア支援が中心ですが、今後は馬を介したコミュニティづくりに取り組みたいなとおっしゃっていますね。

角居 最終的には、高齢者から子どもたちまで、皆の身近に馬がいて誰もが楽しめるコミュニティを作りたいというのが目標です。

山根 今、北海道で新しい試みを進められているとお聞きしましたが、その一環ですか。

角居 浦河町という所で、障がい者乗馬の団体が精神科のお医者さんと共同で、障がい者乗馬用の馬を育成する計画を進めています。そこでは、乗馬用の馬のしつけも、障がいのある方自身が行うというものです。

山根 それは皆さんの就労支援にもなりますし、

馬の幸せが人の幸せにも

初めて競走馬の厩舎を訪ね、私も馬に触れて馬に人の心を癒やす力があることを強く感じました。角居さんが厩舎の一人ひとりの力、そして一頭一頭の馬の力を最大限に引き出していることで人も幸せにする活動が、これからさらに広がることを期待しています。

山根 基世 (敬称略)

CITIZEN OF THE YEAR 1990-2017

受賞者の皆さん

1990年に創設され、これまで28回にわたり、市民に感動を与え、社会の発展に貢献した市民を顕彰してきたシチズン・オブ・ザ・イヤー。1990～2017年度の受賞者の皆さんの素晴らしい活動をご紹介します。

2017年度

清水 辰吉さん
地元小学校の新入生に55年以上の間欠かさず入学記念の苗木を贈り続ける

グリズデル・バリージョンさん
障がいのある外国人旅行者に役立つ日本観光情報サイトを制作・運営

角居 勝彦さん
引退した競走馬の命を守り、幅広い分野でセカンドキャリアを支援

2014年度

原田 燎太郎さん
過酷な生活を余儀なくされている中国の元ハンセン病患者を支援して10年

本間 錦一さん
水難救助隊長として40年、海の安全を見守る87歳の現役ライフセーバー

阪井 ひとみさん
社会的支援が必要な人たちが地域で暮らし自立できるよう、入居支援を続ける

高山 良二さん
シチズン特別賞
地元住民たちと共に、カンボジアで地雷処理と復興支援を続ける元自衛官

2011年度

税所 篤快さん
バングラデシュで、映像授業による高校生の教育支援に取り組む

竹内 龍幸さん
盲学校の生徒のために始めた書籍の点訳を半世紀以上続ける

笹原 留似子さん
東日本大震災の被災地で、復元納棺のボランティアやご遺族の心のケアを続ける

2008年度

伊藤 和也さん(故人)
戦禍のアフガニスタンで緑豊かな国にと、農業支援に取り組み、現地住民に親しまれる

川崎個人タクシー協同組合
知的障がい施設の子どもたちと行く「タクシードライブ遠足」を30年間継続

出水市立荘中学校
ツルの羽数を数えて公式記録とする活動を全校一体で続けて半世紀

2005年度

堀田 健一さん
障がい者一人ひとりのニーズに合わせた自転車を、手作りで26年間作り続ける

吉野 健治郎・勝親子
親子3代、45年以上、地域のお年寄りへ眼鏡の贈り物を毎年続ける

日本スピンドル製造株式会社 社員一同
JR福知山線での脱線事故現場で社員一体となり救援活動を実施

2001年度

伊藤 明彦さん
全国各地を訪れ、広島・長崎の被爆者1,003人の生の声を収録

大島 誠人さん
自宅の望遠鏡で変光星「WZ」の増光現象を世界で最初に発見

菅谷 昭さん
チェルノブイリ原発事故の被ばく者の治療に、甲状腺外科医として従事

1997年度

葛木 みどりさん
南米パラグアイで、子どもたちの栄養改善に向けた学校給食を実現

高澤 圭介・ナミ子ご夫妻
私財を投じてお年寄りや障がい者が気軽に立ち寄れる家を完成

愛知県立東山工業高等学校 車いす部
高校生が車いすの電動化ユニットを開発。12台を利用者に寄贈

1993年度

宇佐美 松恵さん
1万枚を超える座布団を手作りし、日本はもちろん、アフリカまで送る

佐藤 昭夫さん
パーキンソン病の患者さんたちの送迎、乗降を手助けして12年

8/6 竜ヶ水駅 災害救助活動グループ
土石流にのみ込まれた列車乗客を、冷静な判断で献身的に救助

2016年度

NPO法人 就労ネットうじみつくすはあつ
野球ボールの再生を通して、地域との交流や障がい者の就労支援に貢献

塗魂ペインターズ
国内外を問わず駆けつけ、無償で塗装ボランティアを行う

堀内 佳美さん
読書が身近でないタイで、読み聞かせや幼児教育に献身

2013年度

TOY工房どんぐり
障がい児のためにオリジナルの布製おもちゃを作り続けて30年

チャイルズエンジェル
子ども達の夢をかなえたいと募金活動に奔走し、動物園にキリンを寄贈

上中別府 チエさん
高齢になってから夜間学校へ通い、勉学や課外活動に熱心に取り組む

2010年度

吉田 守松さん
半世紀にわたり横断歩道で、登校する児童の安全を見守り続ける

吉岡 諒人さん
夏休みの観察・実験を通じて、「アジゴクは排泄しない」という通説を覆す

樋口 強さん
がんを乗り越え、自らの落語で同じ病の患者と家族を励まし続け10年

2007年度

西谷 勲さん
中学の夜間学級に50年間仕送り続け、生徒たちの学ぶ意欲にエールを送る

車内清掃を続ける高校生有志
JR香椎線・西戸崎駅で同じ中学出身の高校生が、自発的に下校時に乗車した電車でゴミ拾い

谷垣 雄三さん
西アフリカで25年以上にわたり、外科医として現地医療に携わる

2003年度

高松 由美子さん
長男を失った深い絶望を胸に、同じ試練と戦う犯罪被害者遺族らを支援

遠藤 マルシアアケミさん
お弁当の配達で縁で、資金難で閉校したブラジル人学校を再開校

曾我 健太さん
ひざ下から義足ながら、夏の甲子園で奮闘

1999年度

セイヤー・ミドリさん
と那嶺 政江さん
在日米軍の父と地元女性の間で生まれた子どものために、学校を開校

トーマス・カンサさん
修理、再生させて母国南アフリカに寄贈した車イス、2,000台

録音グループ「声」の皆さん
視覚障がい者のため、新聞や新刊書の録音テープを届けて25年

1995年度

川田 龍平さん
命がけで薬害エイズに立ち向かい、実態の認知と責任追及に献身

木村 三男さん
濁流にのまれた母子3人を発見し、飛び込んで全員を救出

神戸商船大学「白鷗寮」自治会
阪神淡路大震災発生から20分後、寮生250人が人命救助に出動

1991年度

チヨン・キューキョンさん
長年の診療所勤務から長年、実態の認知と責任追及に献身

馬場 国敏さん
湾岸戦争で原油汚染にあえぐ野鳥を救うため、国を動かし現地で活動

十円会
月会費10円というユニークな福祉の会を続け、地域活動に大きく貢献

2015年度

NPO法人 JHDAC
病気などで頭髪の悩みを抱える子どもたちにウィッグを無償で提供

山崎 充哲さん
多摩川の生態系を守るため外来魚を預かる「おさかなポスト」を運用

白石 祥和さん
不登校や引きこもりの若者たちに寄り添い、自立や就労支援に取り組む

2012年度

吉村 隆樹さん
障がい者や難病患者を支援するパソコンソフトを開発し、無償で提供

渡辺 玉枝さん
自然体の生き方で、2度のエベレスト女性最高齢登頂記録を達成

ルダジングワ 真美さん
紛争から立ち直ろうとするルワンダで、義肢提供や就労支援に献身

2009年度

吉島 美樹子さん
がん治療による脱毛に悩む人に「タオル帽子」の型紙を作成し、送り届けている

多以良 泉己さん
リハビリで始めたパン作りが「天使のパン」として多くの人に勇気を与えている

茂 幸雄さん
福井・東尋坊に自殺を防ぐための相談所を作り、パトロールと再出発支援を行う

2006年度

川越 恒豊さん
刑務所内で放送される人気番組のDJを、27年間で300回以上続ける

桑山 利子さん
スリランカの学生支援を続ける一方、自身も念願の高校卒業を果たす

有城 覚さん
交番に届けられる動物を引き受け、自力で移動動物園を開園

2002年度

谷村 基さん
励ましの手書きはがきを35年にわたって独居老人に送り続ける

武井 弥生さん
東ティモールなど海外での医療支援を医師として継続

アフガニスタン義肢装具支援の会
アフガニスタンの人々のために義肢を製作・進呈

1998年度

岸本 康弘さん
ネパールに自費で学舎を建設、無償で子どもたちの識字教育に打ち込む

金子 聡美さん 安田 志津さん
ドナーカードへの関心と理解を目指し、自転車で日本列島を縦断

「福祉ネットワーク池袋本町」の皆さん
電気ポットのセンサーを使い、一人暮らしのお年寄りを地域で見守る

1994年度

星野 勇・シズエご夫妻
足の不自由な方のために1,000足を越える靴を無償で修理・改良

山下 秀治さん
知的障がい者施設で散髪奉仕を続け、先生と呼ばれる信頼関係を構築

森本 春子さん
山谷の労働者たちの相談相手になり、食べ物や衣類などの支援を続ける

1990年度

加藤 幸男さん
バスの運転中に負傷者を発見。適切な判断と乗客の協力で迅速に救助

鈴木 陽子さん
過疎地の医療に貢献したいと42歳で医師免許を取得。単身北海道で医療活動

林 鎌友さん
使用者の立場に立った点字カレンダーを作成し、13年間全国に送付



CITIZEN

清水辰吉さん

地元小学校の新一年生に
苗木を贈り続けて半世紀



グリズデイル・ バリージョシュアさん

日本のバリアフリー情報を
英語で外国人旅行者に
発信



角居勝彦さん

引退馬のキャリア支援で
馬と人との共生を目指す



シチズン時計株式会社

〒188-8511 東京都西東京市田無町 6-1-12

TEL.042-466-1231 FAX.042-466-1280

<http://www.citizen.co.jp/coy/index.html>